

# *Friends Project '14*

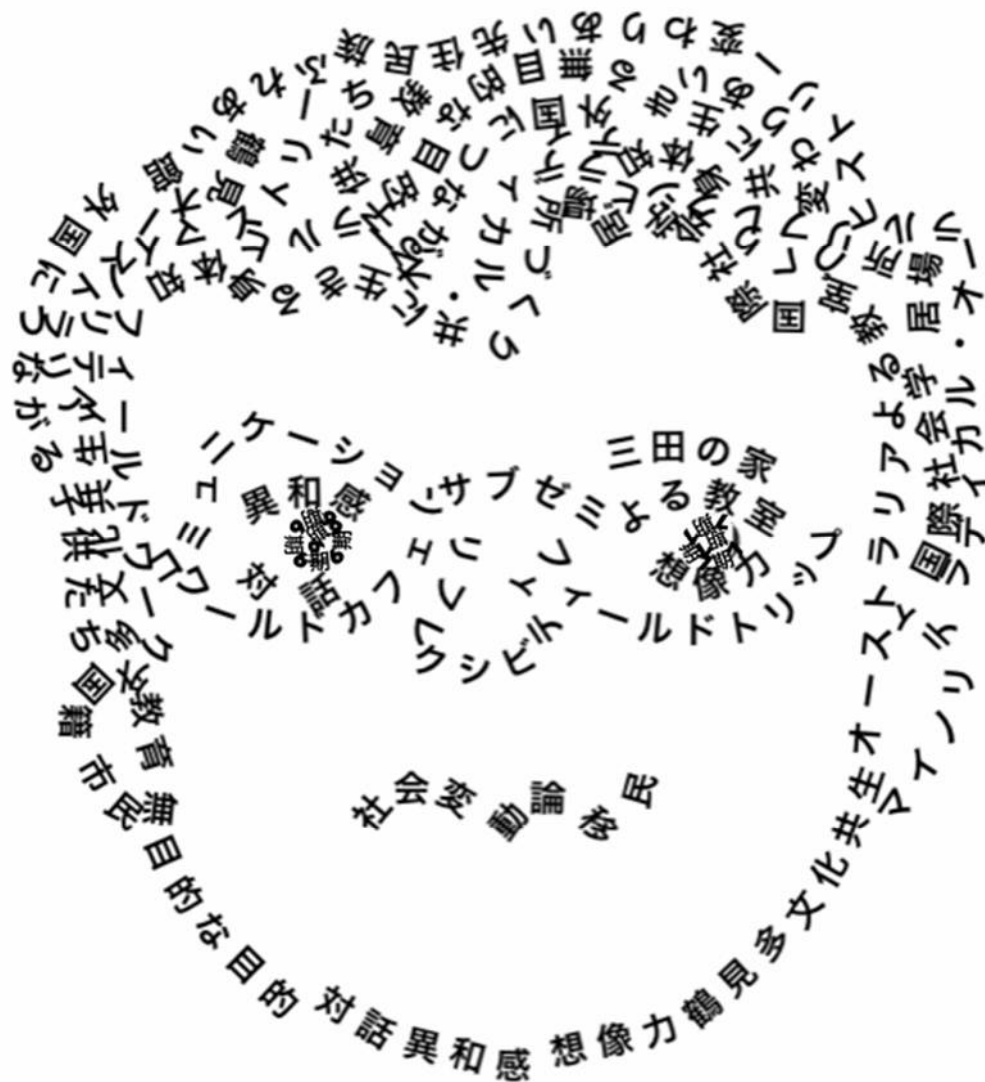
---

**慶應義塾大学 塩原良和研究会**

# 目次

1. 塩原ゼミとは	・・・	2
2. フレンズプロジェクトとは	・・・	3
3. よる教室活動報告	・・・	5
4. 居場所づくり活動報告	・・・	7
5. ゼミ生による活動報告	・・・	9
6. 指導教員から	・・・	41
7. 編集後記	・・・	42

# 塩原ゼミとは...



あえて、「塩原ゼミとは？」という問いに一つの答えを出すことはしない。

ゼミ生に「塩原ゼミとは？」と尋ねれば、

一人一人、違った答えを返してくれるだろう。

きっと、それは、ゼミで扱う様々な問いと同じように、

一つの決まった答えなどない問いだから。

# Friends Project とは

2009年に始まった、塩原良和研究会の大学生と外国につながる子どもたちの協働プロジェクトです。今年度は鶴見国際交流ラウンジを主な活動拠点とし、子どもたちとの交流を深めてきました。「対話による相互変容」を軸とし、一つの定められた目標を達成することで終わるのではなく、あらゆる場面で対話と思考を重ね、絶えず変わり続ける実践を試みています。

## TSURUMI

私たちは、2つの活動を行っています。1つ目は、3年生が運営する、NPO法人ABCジャパンと塩原良和研究会が協力して開いている学習サポート教室。2つ目は、地域の高校生を対象とした居場所づくりプロジェクトです。

毎週土曜日、午後5時から午後8時の間、どちらも鶴見駅前にある鶴見国際交流ラウンジの教室で活動を行っています。毎回、各教室5～10名程の大学生と中高生が集まり、親睦を深めています。

### 鶴見よる教室（中学生+大学3年生）

この教室では、高校受験という目標に向かって、日頃の学習や定期テスト対策、面接練習のサポート等を、生徒一人一人のニーズに合わせて行っています。ただ勉強をするだけではなく、勉強の合間や勉強後にみんなでお菓子を食べながらおしゃべりをしたり、ゲームを楽しんだりもします。あくまで高校受験を見据えた教室ではあるものの、外国につながる生徒たちの可能性を引き出したり、悩みを共有する場としての役割も果たすべく、大学生は毎週話し合いを重ね、より良い教室作りに励んでいます。

## 居場所づくりプロジェクト（高校生+大学4年生）

勉強にとらわれず、生徒たちが気軽に立ち寄ったり、安心できる場所を模索しています。テスト勉強をするもよし、進路相談をするもよし、終始おしゃべりに徹するもよし、といった、自由な空間となっています。また、毎月一度は教室の外へ出かけ、高校生が自分たちだけではできないことを大学生と共に経験しています。「先生と生徒」という枠を越え、大学生の私たちにできることを模索しながら、のびのびと活動しています。

# よる教室 活動報告

よる教室とは、本ゼミの7期生が中心になって、中学3年生の外国につながる子ども達への学習サポートを、毎週土曜日3時間行うという活動です。活動目的として掲げているのが、「中学生が全員、全日制の高校に進学できるようサポートする」としています。また、学期別目標として、春学期には志望校決定、学習の環境を整える、秋学期には受験に向けての学習を進めるとしています。

よる教室には様々なバックグラウンドの外国にルーツを持つ子供たちが通っています。目標を高く掲げて一生懸命勉学に励む子どももいますが、日本語がまだ流暢に喋れない、シャイで消極的、学校に勉強に着いていけない、集中出来ない、など、ある意味“個性的”な個々人が集まる不思議なよる教室。学校や塾とは違うので、その各々とひとりの人間として付き合っていく上で、活動目的へ向けて日々奮闘しました。プライバシーと編集の関係で個々人を詳しく描写することは割愛させていただきますが、ゼミ生は密度の濃い関係を築けたことをとても嬉しく思っています。

ここ一年よる教室での活動報告としては、最初に掲げていた目的、方向性が活動中に少しずつ変わって行ったということからお話させていただきたいと思います。活動を進めて行くうちに、定時制の高校にも外国につながりをもう子どもたちへのサポート体制が整っている学校があることが徐々にわかっていったので、秋学期に入ってから、「生徒一人ひとりに合った高校への進学を目指す」という方向性に変わりました。

もちろん葛藤や悩みもありました。生徒の学力と志望校が不釣り合いであるという現実的な壁にぶつかった時に、ゼミ生が何をどうするべきか、難しい問題でした。本人にゼミ生から、「この高校にはきっと受からないからもう少しレベルを下げよう」といった旨を言うというのも酷だし、それを聞いた子どもたち勉強に対するモチベーションを失ってしまうかもしれないという何よりも怖い状況を避けるため、話を聞き励ましつつ、一緒にいろんな学校の説明会に行ったり、ウェブでホームページを調べたりと、とにかく選択肢を広げることに努めました。また、ゼミ生自身の経験とは違って、子どもたちの家庭の経済状況から、滑り止め

を受けず、公立高校のみの一本勝負だったので、その分責任も大きいなあと感じました。

最終的には、子どもたちが前期よりも前向きに勉強に取り組むようになっている姿勢や、成長を見ているうちに、ゼミ生たちも無理に泊めることはせず、全力で彼らが受かるように精一杯サポートしようという方向に落ち着きました。何度も方向性は変わって行きましたが、これも常に何が子どもたちに「ベスト」であるか、もしかしたら本当に「ベスト」という答えはないのかもしれないけれど、試行錯誤がこの活動自体を表しているのではないかと感じます。



# 居場所作り 活動報告

居場所作りは、本ゼミの6期生が中心になって、高校1～3年生の様々なルーツを持つ学生の支援を行うという活動です。固定メンバーはいたものの、友達を連れて来ることもあったり、突然ふらりと立ち寄ってくれたり、結果的には全く義務感も厳しいルールなどもない「居場所」というものを作れたかなと思っています。

今年度の方針は、「一緒に体験して視野を広げよう」でした。4月19日から1月10日までに全34回実施され、月1回のペースでのイベント実施を目標にしました。高校生との活動目的は、方向性が十人十色の高校生たちが、この居場所で共に過ごすことで、今現在、そしてこれから先様々な人生の選択の場面に出逢う彼らの選択肢・可能性が少しでも広がったら良いなという思いが込められています。よって視野が広がるような体験をしていこう、ゼミ生が上から目線でその体験を提供するのではなく、その場を共に作っている一員として「一緒に」体験していこうとなりました。

具体的にどんなイベントが行われたかというところ、つくしのアスレチック（要するに公園で遊ぶ）、ボーリング、潮田祭り、「大学で学ぶ」という具体的なイメージを持ってもらうために神奈川大学オープンキャンパス、映画干涉、東芝未来科学館、クリスマス会、と盛りだくさんでした。

活動を通して見えてきた変化があります。まず「居場所の在り方」についてお話ししたいと思います。ゼミ生の「甘え」で、人懐っこい高校生とばかりつい話してしまっており、そうではない子とのコミュニケーション不足が指摘されました。また、高校生同士の関係性もまだ出来ておらず、そこでゼミ生が意識的に広く話しかけるようになりました。教室で過ごす中で、自然と高校生同士の仲も深まって行きました。高校生自ら輪の中に入って来てくれるようになったのは大きな進歩だったと思います。

「信頼関係」の変化もありました。ゼミ生は高校生の私生活について気になることがあっても、どこまで踏み込んでいいのかという迷いと躊躇がありました。世間話を続けているうちに、進路、家族、恋愛などについて自分から話す、相談してくれるようになりました。また、活動日意外にも連絡がつき、ゼミ生をある意味で「友・兄・姉」的な存在で頼って相談することが増えました。ゼミ生が一番嬉しかったことは、いつの間にかゼミ生を名前と呼ぶ



でくれるようになったことです。親近感や信頼関係が最も具現化したものではないかと感じています。

最後に、「高校生自身の変化」もありました。「外国人」という“レッテル”としての母語を話したがるない高校生たちだったのですが、友達同士で生き生きと母語を話す姿が見られるようになりました。また、日本語が得意でなく、あまり話さない子も、自分から積極的に話しかけてくれるようになりました。その理由として、一年の間に日本語がとても上手になったこと、また、日々の生活が充実するようになり、自分に自信を持てるようになったのかなと感じます。ゼミ生として、高校生たちにこのようなポジティブな変化が見られ、感無量でした。

もちろん、本ゼミ初めての高3進路支援ということもあり、葛藤もありました。高校生本人と家族の持っている情報・選択肢の少なさに悩みました。しかし、めげることなく四大／短大・夜間／専門学校に分けて進路説明プレゼンを試みても、思いのほか興味を示してくれず、意外にも教室での雑談や SNS でのやりとりが一番進路について話せた時間になったかなと思います。高校生の興味を探る職業案内や、個人面談を行うことで、現実の厳しさと、自分で道を決める必要性についても話しました。また、学校の先生にキーパーソンを見つけられない現実にも頭を抱えました。思った以上に私たちゼミ生を頼りにしてくれていたのです。ある意味人の人生を左右するプレッシャーと責任感にも焦りを覚えました。更に、“夢”を尊重すべきか、現実の厳しさを教えるべきか、誰かが教えるべきなのだが、どう伝えれば良いのか、悩みは尽きません。高校生の進路にどれほど関わって良いのかという不安もあり、一年間という限られた時間で面倒を見切るのは難しいこと、中途半端な接し方は無責任ではないかという葛藤だらけの活動でもありました。居場所づくりも答えがあるのではなく、試行錯誤の繰り返し、みんなが少しずつでも前進・成長出来た場所になっていれば幸いです。

# ゼミ生による活動報告



試行錯誤

6期 佐川菜津美



つくしのアスレチックにて、水遊びのゾーンで Y 君と C 君が小さい子が遊べるように手伝ってあげている一枚。誰が何を言うわけでもなく、気づいたら二人が自発的にこの子の面倒を見てあげていた。まだ今年度のフィールドワークが始まったばかりで高校生一人一人のことを今ほどわかっていなかった時だったので、私が思っている以上にすごく心優しい子たちなのだと感じ、見ていてすごく嬉しくなったのを鮮明に覚えている。

今だから言える〇〇、今年のフィールドワークで嬉しかったこと

大学生を名前で呼んでくれるようになった、最初はずまらなさそうにしていた子が段々と居場所の良さを感じてくれるようになった、進路に悩んでいた子が紆余曲折を経て進学先を決められた、一年前はあまり話しかけてくれなかった子が自発的に来て良く話すようになった、外国にルーツのある友達を連れてふらっと遊びに来てくれた、「終わっちゃうのが寂しい」と言ってくれた… 一年間彼らと一緒に過ごすで見聞きした些細なこと一つ一つが、私にとってはどれも嬉しかった。また個人的なことだが、私の誕生日に C 君がお菓子作ってきてくれたことがとても嬉しかった。私が冗談で「誕生日にお菓子作ってきてよ！」とおねだりしたことがあり、当の私はそのことをすっかり忘れていたのだが、誕生日明け FW に行くと彼がその時の約束を覚えていて私のためにプリンを作ってきてくれていた。一度マカロンを作ろうとして失敗して作り直した上に、私だけでなく皆の分まで、しかも甘いものが苦手な大学生用のコーヒー味のプリンまで作ってきてくれていた。彼のもつ優しさに触れて、その場にいたみんなの心がすごく温かくなった出来事だった。

この一年は、高校生たちの進路や恋愛、家庭の問題を初めとして、葛藤と試行錯誤だらけだった。彼らが善く生きることができるようにと考えれば考えるほど、何が正しくて、何が誤りなのかわからなくなることも多かった。けれど、今になって思うのは「配慮」と「遠慮」は違うということだ。一人一人のバックグラウンドに想像力を及ばせて、配慮の気持ちをもつことはもちろん大事だけれど、かといって彼らが善く生きるために必要なことを遠慮して言わないのは、楽をしているだけだったと思う。正面から向き合って対話をすると、時には自分も傷つくかもしれないから、正直すごくしんどい。けれど、高校生一人一人のことを真に大切に思うのであれば、大切に思うからこそ「遠慮」いう大義名分に逃げずに、正面から向き合って対話を重ねていくべきだと、振り返ってみて改めて思った。



楽しい！の先に見えた、迷い・ためらい。

その先に生まれた、信頼。

6期 渡辺実緒



### ◎嬉しかったこと

私がFWを休んだ日に、高校生が「みおいないの?」「話したいことがあったのに…」などと話していたと聞いて、とても嬉しかった。そして、そう言ってくれたことに驚きもあった。

初めは私たちにあまり馴染まなかった高校生もいた中で、どうやって関係性を築いていこうかと悩み、考えながら高校生に接していたが、少しずつこうして心をひらいてくれるようになったのだと、私の予期せぬ場面で彼・彼女たちの何気ない一言から実感することができた。

### ◎*Friendly Project*を終えて…

鶴見の高校生たちと過ごす時間は、私の学生生活の中でとても貴重で、刺激的で、幸せな時間だった。

一緒に過ごす時間を心から楽しんでいたし、この活動で色んなことに気づかされ、学ばせてもらった。

もちろん、楽しいことばかりではなく、迷い、悩むこともあった。彼・彼女たちは日常生活のことから進路、家庭のことまでさまざまな相談をしてくれたが、そこには自分たちにはどうすることもできない難しい問題もあり、直面するたびに自分の無力さを感じていた。

それでも、私たちだからこそできたこともあったのだと思う。高校生たちが、何をするでもなく毎週のようにラウンジにやってきて他愛もない話で盛り上がる姿や、母語で生き生きと話す姿、困ったときに話してくれる姿などを見ていると、1年間この活動を続けてきた意義はきっとあったのだと感じる。

鶴見の高校生たちの未来が、素敵なものであることを心から願う。みんな本当にありがとう。



## お気に入りの写真



### 今だから言えること、うれしかったこと

正直、去年や今年の初めまで、自分にとってFWは憂鬱なものだった。思い返してみると、「拘束時間が長い。」「お世話をしているような感覚。」というような理由だった。しかし今では、そのようには思わない。むしろ最近ではFWに行けないと言っていた日でも時間に余裕ができれば自主的に鶴見に向かっている。

上で述べたような変化が起きた理由は、夜教室が自分にとっての一つの居場所となったからだと思う。そこに行けば自分を受け入れてくれる人がいる、自分を頼ってくれる人がいる、自分の役割がそこにある。居場所づくりをしていたのに、いつのまにか自分の居場所になっていたのはどうしてだろうか。居場所というもの一つの特徴が、「家族」のような「無条件で自分が受け入れられる関係性」であるなら、居場所づくりが、自分の居場所になるのは当然かもしれない。関係とは一方的に成り立つものではない。彼らに対し、「家族」のような関係であろうとしたなら、自分たちが「家族」のようにふるまうだけでなく、彼らから「家族」として見られなくてはならない。居場所とは『共につくる』ものである。もし彼らにとって少しでも居心地がいい居場所をつくることができたのなら、それはゼミ生から一方的に何かを彼らに提供できたからではなくゼミ生と彼らの間にお互いを受け入れる関係性ができたからであろう。

『共につくる』

6期 佐藤公耶



フィールドワークについて連想するイメージ

みんながそれぞれ好きなところに座っていて、いろんなところでいろんな話をされていて、適当なことも真剣なことも色々話しているイメージ

今だから言える○○・今年のフィールドワークで嬉しかったこと

・今だから言える○○

クリスマスパーティーはビンゴがグダグダになって申し訳なかったです・・・！

あとは高校生達とカラオケ行きたいです！

・今年のフィールドワークで嬉しかったこと

高校生にとって少しでも相談する相手になれたこと

→進路や勉強について相談して、資格とかについて自分たちとの会話から何かやってみたいものを見つけてもらうことができたのが嬉しかったです。

(+α : すごく個人的なことですが、自分の誕生日に高校生がFBで誕生日メッセージをくれたことが嬉しかったです)

今年のフィールドワークは表題にもあげたように手探りと模索の連続だったように思います。高校2・3年生は進学というこれまで直面したことのない進路という課題に対してみんなで考え、その他の子にたいしても自らの価値観と彼ら・彼女らの価値観とを照らし合わせていました。

今年のフィールドワークでは、去年とちがって何か決まった目標があるわけではありませんでした。ほぼ毎週振り返りや内容の共有はありましたが、土曜日はその場にただ集まって、そこから全てが始まっていました。今考えても(これを書いている時点ではまだFPは続いています)とても不思議な場所だったなと思います。直接つながりのない高校生と大学生とが同じ場所で同じ時間を過ごす。何か一緒に勉強をするわけでも、毎回イベントを行うわけでもない。こうした場所でこういう時間を過ごすというのは、なんというか社会に出る前最後に抵抗しているみたいで、とても好きだったりします。



「手探りと模索の日々」

6期 巴健太郎

「よく遊び、よく喋れ」

6期 松永博之



#### ・今だから言える〇〇

高校生たちに名前を覚えてもらえたのがとにかく遅かったです。もっと積極的に自己紹介をするべきだったと反省しています…

#### ・今年一番嬉しかったこと

今年は本当によく遊んだ記憶がありますが、クリスマス会は特に印象強いです。なかでも一番嬉しかったのは高校生との料理対決ができたこと。上の写真ですが、勝負を申し込むとノリ良く受けてくれました。彼らとの熱い友情が芽生えた瞬間です。

#### ・「FPでの自己反省」

最後に、よる教室で感じ、学んだことを簡単にまとめたいと思います。最近、人に注意をしたり怒ったりすることは難しいことだとよく感じます。例えばラウンジでは、高校生たちから明らかにツッコミどころの多い問題発言や行動が飛び出してきたりすることが間々ありますが、そんな時、自分は笑っていたり、こらこらと軽いいなす程度のことはしても、何々をしてはいけないとか、注意らしいことは言えないことが多かったです。「優しさ」や「居心地の良さ」を大事にしていると言えなくもありませんが、その後ろ側には、無意識のうちに身を守る姿勢をとり、なんとなくやり過ごそうとしている自分が存在していたとも思うのです。

人に注意をしたり怒ったりする時にはある種のわずらわしさが生じる気がします。相手にどう思われるか、自分は人に注意できる立場にあるのか、そもそも相手と自分はどんな関係にあるのか、そういったことを考えてしまい、いわば自分という存在が揺るがされるような感覚に陥るのです。しかし身を守るだけでは自分も相手も、何も変えることができません。人との関係を築く上で「優しさ」はもちろん大切なものだと思いますが、時にはそのようなわずらわしさを楽にごまかしてくれる便利な言葉になってしまわないよう、意識しなければならぬと感じました。

最後に自分勝手な反省を書いてしまいましたが、私にとってあのラウンジが、本当に楽しいと感じる好きな場所であったことに間違いはありません。高校生やゼミ生、関わってくださった全ての方々に感謝しつつ、残り僅かの時間を大切に過ごしたいです。そしてあの場所で得た、高校生と大学生ならではの不思議な感覚を、今後も忘れないようにしたいと思います。





週に一度帰れる場所  
6期 福井麻矢

お気に入りの写真:クリスマス会の様子。



今だから言えること:

留学をしたため、一年以上ブランクがあったので、最初は復帰するのに戸惑うと思っていました。

今年のフィールドワークで嬉しかったこと:

生徒がみんなフレンドリーで高校生にとっても大学生にとってもフラットに行って楽しめる空間があったこと。高校生が楽しそうにしている姿をみて、嬉しかったです。

自由記述:

この活動を通して、学ぶことが多くありました。コーディネーターの皆様、ありがとうございました。高校生、大学生ともにきっと成長できたと思います。



私は、この1年間事情があって、FPに参加することができませんでした。そのため、この報告書を書いていいものかわからないのですが、行くことができないなかで自分なりに考えていたことを書くことができたかなと思います。

昨年の春からFPに行くことができなくなってから、それと同時に中学からかかわってきた地元での外国につながる子どもたちへの保育ボランティアもお休みしています。ここ何年間か、外国につながる子どもたちとのかかわりを持ち続けてきたのですが、これらの活動にぴたっと行けなくなってしまいました。自分がいままで好きで続けてきた活動に行きたいけれど行けなくなるということは、思っていたよりもつらくて、もどかしいような悔しいようなそんな気持ちでした。FPのことを真剣に、楽しそうに、ときには悩みながら話し合っているみんなの様子をみながら、行けない申し訳なさや、いいなー私も行きたいな、なんて思っていました。

自分にとってあたりまえだった場に行けなくなったいま、自分にできることはあるのかなと悩んでいたときに、はっとさせられた言葉があります。

「どこに行ってもどんな仕事でも、活動でも、それはなんかずっとかかわり続けられているんじゃないかなって思った。日本語支援をやっているところ、教室とか NPO 法人とかぱっと見てわかるような場所に自分を置いていなくても、自分の日々の生活の中にいっぱいあるんじゃないかなっていう。本当は自分たちが生活している、まわりのコミュニティが、まさにその『場所』。だから、たとえその外国につながるのある子どもと接しているわけじゃない、いわゆる『日本人』の人のいる職場で働いているとか、それもかかわり続けていることのひとつなんじゃないかなって、思うようになったというか。だから、やってることで意味のないことはないんじゃないかなって」。

卒論のインタビュー調査のなかで、学生のときに外国人住民支援のボランティアをなさっていた方の言葉です。この方は、多文化共生にかかわる仕事をなさっていたのですが事情があってそのお仕事を辞める決断をなさっています。自分たちが生活しているコミュニティこそが多文化共生の場である、というこの言葉は、私も自分がいる場所でできることをしようと考え方をシフトすることができた大きなきっかけとなりました。いままでよりももっと身近なところ、たとえば友だちであったり、日々の生活の中で出会う人のなかで、何かしらの助けを必要としている人がいたら少しでも力になることができたかなと思っています。そのためにはまず、その声に気づくことのできる想像力をもった人になればと思います。

かかわること 6期 西村英恵





『縦から横へ 点から線へ』  
6期 杉山香央利

### 今だから言える〇〇

→留学から帰ってきて久しぶりに夜教室へ行った初日、ゼミ生と高校生の仲の良さに驚いたとともに少し羨ましいと思った。そして、初対面の高校生にどのタイミングで挨拶をしようかと心の中でオドオドしていたら、高校生のほうから「はじめまして」と声をかけてくれて、些細な事だけど、それが凄く嬉しかったです。

### 今年のフィールドワークで嬉しかったこと

→Mちゃんが私のことを覚えていてくれて「久しぶりだね」と言ってくれたこと、途中参加だったけどみんなにあたたかく迎え入れてもらえたこと、高校生と友達みたいに話せたこと etc.

「何かをしなければ」「何かを言わなければ」という気持ちを忘れて、「そこにいるだけで良いんだ」と相手に対しても自分に対しても思える、そんなよる教室のような場所と時間は、社会人になったら減っていくだろうと思うと寂しいです。中途半端な参加のしかたになってしまいましたが、このFWに参加できたことは財産になりました。短い間でしたが、高校生とゼミ生みんなに「ありがとう」の気持ちでいっぱいです！



いつでもウェルカム〜♥

6期 金修京

今だから言える：心配。途中参加となったFWで果たして受入れられるのか正直心配でした。しかし、同期の優しいサポートにより勇気を出して行ってみたところ、本当にみんなが言っていた通りすんなり馴染めたこと、高校生の優しさに逆に私が助けられるというちょっと情けない結果となってしまいました。他では探すことは絶対出来ない世界にたった一つの「居場所」がありました。

今年のFWで嬉しかったこと：久しぶりに会えた子の成長が垣間みられたことが嬉しかったです。去年はまだ中学生で、会話の内容もたわいのないことだったように記憶しますが、今年は高校に入って「コンピューターを専門にして大学に行きたい」など将来の具体的な目標を持って自分なりに努力している姿が見られて誇らしく思いました。目標がない子も、自分なりに楽しそうに友達と戯れる様子や、自信を持っている様子はとても見ていて清々しかったです。

実は留学やら就活やら個人的な理由で、FWコーディネーターや他の中核メンバーが取り組んで来た進路サポートだったり将来について真剣に考えたりという活動には深く関わることが出来ませんでした。実際コーディネーターのプレゼンテーションで、この一年間の活動の総体を把握出来たくらい私個人の貢献度は少なかったと思います。でも救われたのは、留学に行く前の中学生、今は高校生になった何人かは覚えていてくれて、blankを感じさせないblankさで気軽に話してくれたことがとても印象的でした。写真で選んだのはクリスマス会です。少ない予算の中、みんなの願いをなるべく叶えてあげるべく努力しつつも、これって買った方がいいのではと途中挫折しそうになるも（笑）結局作ってみて、やっぱり一緒に作るって共同作業やプロセス自体に意味があるのだなと後から気づくことが出来ました。私たち大学生に垣根無く近況を伝えてくれる様子からも信頼関係がしっかり築けている証拠ではないかなと思います。



『2年目—変わったことと変わらないこと—』

6期 幸田杏子



◇お気に入りの写真

今年も大人数でわいわい料理して、おいしく食べたクリスマス会



◇今だから言える〇〇

FWC 大変と思ったこともあったけど、FWCとして2年間FWに関われて良かった。

◇今年のフィールドワークでうれしかったこと

高校生たちのやさしさをいろんな場面で見るのができたこと。

(アスレチックや科学館で小さい子たちを気遣ったり、スタッフの方にうるさくて叱られたとき、呼び出された私を気にかけてくれたり、クリスマス会の帰りにわざわざ大学生たちを駅まで送ってくれたり、心優しい高校生たちをみて嬉しかったし、自分ももっとしっかりしようと思った。)

◇ほぼ毎週、夕方5時にあのラウンジに行って、高校生たちやゼミ生と他愛もない話で盛り上がりたり、笑ったり、勉強を教えたり…そんな土曜日が私のなかではもう当たり前になっていた。それがあと何回かで終わってしまうなんて、これを書いている最中もさみしくてたまらない。

先輩たちのプロジェクトを引き継いだ活動。前期のころは、去年隣の教室からみていた5期生の活動と今の私たちの活動を比べて、高校生たちは楽しめているのかと不安になったこともあれば、去年の方がよかったと言われてショックを受けたこともあった。それに、全員が同じ中学に通っていて、みんな等しく高校受験という目標があった1年目のFWとは違って、ばらばらな学年でそれぞれの生活を送っている高校生たちに対して、私たちは何をすればいいのか戸惑っていた時期もあった。でも、テスト勉強を手伝って、進路や将来について一緒に悩んで、ただただ雑談して、そのような時間を過ごしていくうちに不安や戸惑いは消えていった。そういえば、1年目のFWも最初は不安だらけの状態から始まったけど、最後には楽しい場所になっていたな、と思い出す。

特別なことは何もできていないけど、同じ場所と同じ時間を共有してきた。一緒に場をつくってきた。その記憶が、これからもずっと、私たちとかれらのあいだに残り続けたらいいなと、2年目が終わろうとしている今そんなことを考えている。



## 向き合う

6期 伊吹 唯

今だから言えることは、今年度の初めの頃は、この活動を「フィールドワーク」と呼ぶことに違和感があったこと。それまで自分が体験したり、見たり、聞いたりしてきたフィールドワークとは、少し違っているなど感じていた。しかし、今では、ラウンジでの活動と一般的に「フィールドワーク」と呼ばれるものにも共通点があるように感じる。

初めのうちは、正直、高校生たちにどう接していいのかわからなかった。彼らのことを、「外国にルーツを持つ子供たち」という大きな枠組みでしか捉えられていなかった。しかし、会う回数が増えて、一緒に過ごす時間が長くなると、次第に、高校生たちから色々な話をしてくれるようになった。「どうして彼らは、1年前まで見ず知らずの他人だったような私に、こんなに色々話してくれるんだろう。」とふと考えてしまうくらい、たくさんのお話を話してくれた。そうして、少しずつ彼らと何かしらの関係性ができていったことが、今年一番うれしかったことでもある。

そのうちに、「外国にルーツを持つ子供たち」というざっくりした大きなくくりを完全に忘れてはいけないと感じる一方で、それだけでは捉えられない、一人一人のパーソナルな物語が見えてきた。そのことで、「外国にルーツを持つ子供たち」というラベルを彼らに付けること自体に違和感が出てきた。こうして時間をかけて関係性を作って、さらに話をしていくことで、彼らが持つ大きなくくりでの物語だけではなく、一人一人のパーソナルな物語が見えてくる過程は、私が今まで思っていた「フィールドワーク」というものに似ているように感じる。

このフィールドで得られたものは、一般的なフィールドワークで集められるデータや資料のようなものではない。しかし、それらは、これからの自分の人生全体に何か影響を与えてくれるような気がしている。特に、他のゼミ生との関わりという部分で、高校生たちに助けられた部分は大きい。(こう見えても)人見知りなため、すでに出来上がったコミュニティに入るのがとても苦手で、ゼミに参加させていただくようになった初めのうちは、ゼミ生に会うたびに緊張していた。これまでだったら、そのこと



をどうにかしようと思うことはなかったかもしれない。しかし、高校生たちが、私がどういう経緯でいつからゼミにいるかなんて全く関係なく、他のゼミ生に接するのと同じように私にも接してくれたことで、自分自身が他のゼミ生との間に勝手に壁を感じていただけだと気付かされた。おかげで、段々とゼミ生と会っても緊張しなくなったし、普通に話せるようになった。

この一年を振り返って、今までのFP報告書にもあった、自分が何を与えられたかはわからないけれど、自分は高校生からたくさんのものを与えられた、というのはまさにこのことかと実感している。例えばそれは、人との関係性の作り方についてだったり、進路やキャリアについてだったり、自分のアイデンティティのことだったり、「当たり前」は当たり前ではないという気付きだったり。この一年、高校生たちと向き合っていくことで、これまで目を背けてきた自分自身の課題とも向き合わざるをえなくなった。毎週彼らと向き合う3時間は自分と向き合う3時間でもあったように思う。彼らに出会い、そのような機会をもらえたことに感謝したい。



## 高校生との出会い！

6期 熊谷康汰



今だから言える〇〇、今年のフィールドワークで嬉しかったこと

一年間の留学から帰ってきて、久しぶりによる教室に行くのはすごくドキドキしました。一年前、中学三年生だったときに勉強を見ていた子たちが自分のことなんて覚えているはずがないなんて思っていたことは、今から言えます。

一番うれしかったことは、中三のときに一番よく面倒をみていた女の子が僕のことを覚えていてくれて、駆け寄って隣の席に座ってくれたこと。一年前は話しかけてもほとんど言葉が返ってこなかったし、コミュニケーションを上手く取れている感覚がなかったのですが、1年後の彼女は日本語も上達し、笑顔が可愛い女子高生に成長していて、高校や音楽の話が彼女から伝えてくれるのがとても嬉しかったです。

今年のフィールドワークは後期しか参加できませんでしたが、一年前の中三の支援と比べて子供たちの明るい雰囲気にも包まれていたように感じます。留学から帰ってきた直後は、遊んでいるだけのように感じる高校生居場所作りプロジェクトは果たして意味があるのかと疑問に思ったこともありましたが、しかし回数を重ねていくうちに、高校生の方からふと勉強や進路の相談を受けるようになり、プロジェクトの意義を体感することができました。「彼らを支援する」という使命に駆られて固くなるよりも、やわらかく楽しく場所作りをすることが僕らのできることなのではないかと今では思っています。





「 」

6期 福澤美奈

### 今だから言えること

クリスマスパーティーにみきが来なかったの、実は結構怒ってた。笑 ポテサラ班唯一のメンズを失ってつらかった。M君とC君が手伝ってくれなかったら発狂してた。

### 今年のフィールドワークで嬉しかったこと

高校生の変化や成長が見られたこと。中学生だった子たちが高校生になって、特に女の子は見た目もどんどん変わっていった。性格も落ち着いたというか、大人になった子が多いように思う。出会った頃にはほとんど話せなかったMちゃんが日本語で色々な話をしてくれるようになったのも嬉しかった。

この教室のことを、何て表現すればいいのかよくわからないんです、普段から。

友達に「フィールドワーク」って言って「ナニソレ」って返されたとき、便宜的に「うーん、ボランティア的な感じ」とかいうこともあるけど、自分の中では違和感がすごい。

だって、私たちは特に何も与えていないんですよね。むしろ自分たちが与えられる側だと感じることもすらある。

おしゃべりして、ちょっぴり一緒に悩んで、またおしゃべりして、ちょっぴり勉強して、遊んで。

この空間を表現する言葉がまだ見つかりません。

こんなことを去年からずっと言い続けている気がするけど、それが私たちの答えなのかなとも思う。

キャッチコピーも、散々悩んだ挙げ句、この決まらない感じこそがフィールドワークを象徴しているんだという結論に落ち着きました。

思えば就活でもなかなか上手く伝えられませんでした。

面接の3分の枠では語りきれない、私たちと彼らの居場所。

そういえば、フィールドワークを始めた当初は、何かを与えようと必死だった気がします。

ただのトモダチのような関係、フラッと遊びに行ける場所になったのは、いつからだろう、なんて、たまにふと考えます。





## 足と、心を、ともに動かす

6期 水野上 萌



今年のFWで嬉しかったこと、それは、みんなが声を潜めて話しかけてくれたこと。「・・・実はさ、俺の友達に好きな人ができてさ」「・・・ほらみて、これ」声を潜めるとのこと、それは、「わたしはあなただけに届けたいんですよ」というサイン。みんなに向けてではなく、わたしに発信したいことがあるんだと、嬉しかったです。あまり参加回数が多くないなか、そういったささやかな出来事に心を躍らせていました。

今だから言います！もちろん！！「ぼぼちゃん」だなんて愉快的な命名して、ごめんなさい！！笑

足と、心を動かす——今年のFWをまさに体現していると思います。わたしは今年、私的な活動が多くて去年ほどは参加できませんでしたが、そのような中でもイベント事の参加率は高かったと思います。つくしのアスレチックや東芝未来科学館、クリスマス会など、一緒に鶴見という街を飛び出して、体を動かし心を動かした体験のすべてが印象的でした。今年度のFWの方針は、「一緒に体験して視野を広げよう」。正直、彼らと過ごしている時にこの方針を意識したことはありません。けれど、振り返ってみるとこの方針の通りFWをしていたと思います。アスレチックで童心に戻ってみんなと一緒に身体を動かして汗を流したり、静電気で髪の毛を逆立たせて一緒に興奮したり、ケーキにデコレーションして笑い合ったり、ともに感動してきました。彼らは一つ一つのことを全力で楽しみます。その姿勢から学ぶことが多かったです。私たちができないような思い切ったことができることも、羨ましく、微笑ましく思いました。

2年間のFWに終止符が打たれようとしています。1年前、彼ら彼女らが中学生だったときは、「勉強」というクッションがありました。「勉強」は、無条件に彼女らに関わるためのツールになりえ、その一方で、子どもたちに私たちは「先生」として映るなど、距離を感じさせる理由にもなりえました。しかし、高校生になってからは「居場所づくり」。「勉強」が占める要素は少なくなりました。最初のころは「とっかかり」がなく、自分の中で何かを準備してから話しかけにいました。しかし、「勉強」がなくなってから格段に彼らとの距離が近くなりました。「先生」ではなく、下の名前と呼ばれるようになり、よりプライベートな話題も増えて心の距離が近くなったのを感じました。何かを「教える」ことから、ともに「学ぶ」スタンスにシフトしたと思います。彼らもわたしたちの見方が変わり、私たちが彼らも見方が変わり、互に対する視野の広がりがあったのではないかと思います。



## 「居場所」に対するマイアンサー

6期 木藤真夕



果たして、どんな高校生が、何人くらい、どんな想いで、何を望んでここへ来るのだろう。

“居場所作り” …居場所ってなに？

私は、ここで何をしたら良い？彼らと何を話したら良い？

2014年度、第1回目の夜教室。不安と疑問と、ちょっとわくわく。

はじめの方の私にとって、夜教室とは“時間を作って行く場所”だった。

あくまでも生活の中心はバレーボールで、

「練習の後は疲れているし。次の日も練習だからなるべく早く帰りたいなあ。」

そんな風に思いながら、時間を見つけて行く。

(今だから言えるけど、同期に頼りっぱなしでした。ごめんなさい。本当にありがとう！)

目的はないからこそ、その日のメンバー、その時の雰囲気によってちょっとずつ違う教室。

帰るときには、来たときに感じていた疲れや悩みがなんだか軽くなっている。

自然と、肩の力を抜けるところ。だから、また来たくなる。

突然、自分の家庭環境やバックグラウンドについて話してくれる子もいる。

それぞれが何かを抱えている。そして、色々なことをちゃんと理解している。

上手く言葉にはできないけれど、真っ直ぐな彼らに、強い力を感じた。

彼らが心を開いてくれたときは、なんだか嬉しい。私も自分のことを話したりした。

鶴見のラウンジを訪れるようになって2年目が終わろうとしている。

やっと気付いた、ここの居心地の良さ。

無意識に、能動的に“自然と足が向く場所”。

でも、これは、今の私だからこそ感じられる居場所なのかもしれない。余裕があるからこそその居場所。そして、時間をかけてやっと、大切な場所になった気もする。

居場所とはそんなものではないかと思う。

その時の、その人の、タイミングやコンディションによって、変化しうるもの。

居場所に求める重み、感覚、それぞれ異なって良いもの。

そういった違いがある上で、共通の空間があること。確かに存在する同じ1つの空間。

みんな求めるものが違うけれど、でも、たぶんそれでいい。

大学生活の中で、色々な人に出会った。

私自身、自分の力ではどうすることもできないような現実にあふついたり、歯がゆい想いをしたり、疲れてしまうこともたくさんあった。

しかし、大学生活で出会った数多くの人たちの中でも、自分を飾らず、正々堂々と生きている彼らは、群を抜いて魅力的な存在だと思う。

たっぷり、ゆったり、贅沢な時間が過ごせる土曜の夕方。鶴見の国際ラウンジ。

みんなの居場所、そして私の居場所。ありがとう！



フィールドワークでうれしかったこと

担当の L ちゃんが、よる教室が終わった後、「今日はありがとう。」とたまに line をくれること。夏過ぎ頃から、私の名前を何度も呼んでくれるようになったこと。ほかの生徒たちと楽しそうに話している様子を最近よく目にする事。

夜教室が始まった当初、「信頼関係を築く」ことが必要不可欠であるとわかってはいたものの、夜教室における信頼関係がいったいどんなものであるのか、なかなかつかめなかったように思う。でも、高校受験という一つの目標だけではなく、家庭や学校でのことをいろいろと相談してくれるようになったり、本音で、素直に、私たちに接してくれるようになっていく彼らを見て、私たちが築き方でのいいのだという風を感じるようになった。まだまだ手探り状態ではあるものの、「塩原ゼミ夜教室」としては非常に良い状態にあるのではないだろうか。

「信頼関係とは何か？－私たちが築き方でのいいのだという風を感じるようになった。まだまだ手探り状態ではあるものの、」

7期 有賀 彩織







中学生も大学生も大奮闘！受験勉強真っ盛り！

7期 仁保 麗

自分はこの日参加できていないが、皆で共有している写真の中で一番いいなと思った。皆の顔に自然と浮かぶ笑顔が素敵で、夜教室がしっかりと形として成り立っているだけでなく、子どもにとっての居場所としても、確実に意味のあるものになっているという印象を受けた。

今だから言える〇〇、今年のフィールドワークで嬉しかったこと

7期生の働きかけが功を奏し、中学生の意識に何らかの影響を与え、行動の変化をもたらしたと聞いた時は嬉しかった。例えば、7期生の声かけや話し方、説得により、中学生の勉強の習慣が身に付いたり、より集中するようになったりしたなど、度々そのような、報告を聞くことができた。夜教室で貢献は出来ていないが、自分も同じように中高生を指導する立場である故、理解できる共通の難しさがある。それは、既に述べた通り、他人に影響を与え、行動を変えさせることだ。きっと、7期生の「受からせたい」という真剣な思いが、夜教室の生徒を「変えた」のだろう。上から目線のコメントになってしまうが、皆の働きを本当に誇らしく思うと同時に、感謝の気持ちで一杯だ。

既に述べた通り、皆の献身的な夜教室の活動により、生徒が日々成長しているのだなということが感じられてとても嬉しい。

秋学期の夜教室はほぼ受験一色で進めてきて、それも残りわずか。勿論全員ハッピーに志望校に合格することが理想だが、受験に絶対はない以上、最後まで気が抜けないだろう。しかし、例え何かが上手くいかなかったとしても、苦い思いをして今年を終えないことを願う。同期の真剣な向き合い方を見て、我に返ることや追いつかなくてとは、良い危機感を持つことがしばしばある。そんな立派な同期に塩原ゼミを通して出会えたことをとても喜ばしく思う。

## お気に入りの写真



今年のフィールドワークで嬉しかったこと

春学期に見た子どもの様子と、秋学期に見た子どもの様子が良い意味で大きく変わっていたこと。

一年に二回しか参加しなかった自分が何かを書くのは大変おこがましいのですが、少しだけ書きます。

今年のフィールドワークは都合上ほとんど参加できなかったため、私が彼らに何かを与えられたわけではないことはもちろん、彼らと関わることで私自身に何らかの変化が起こるようなこともありませんでした。

ただ秋学期に一度行った際に、春学期には勉強に対して全然集中できていなかった子が座って一生懸命勉強している様子や、会話したときの印象が違っているのを見たことでフィールドワークを実施したことが何らかの形で彼らに良い変化をもたらしているのであろうことを実感することができました。

来年はどのような形で実施されるのかわかりませんが、出来る限り出席し、子どもたちとの関係性を築いていければと思っています。

土曜夜の鶴見で、大学生と子どもたち。

7期 田中 友輝



### キャッチコピー: マラソン

よる教室に実際に行き始めるまでは、教えるスキルがあるのか、どんな子どもたちなのか、仲良くなれるか...など悩みは尽きず億劫になりがちでしたが、一度行き始めたら悩む暇なく走り抜ける必要性や、一度始めてしまった以上中途半端に投げられないこと、そしてなによりやみつきになることにかけて！

今だから言える〇〇、フィールドワークで嬉しかったこと  
F君の落ち着いた無さ、自由奔放さに毎回げっそり生気を持っていかれていたのは周知の事実ながら、一方で僕は彼の見せる無邪気な笑顔に毎回メロメロになっていました。(特に最近ではF君のおじいちゃん的立場で笑顔に癒されています。ああ孫が欲しい。)

### 自由記述

キャッチコピーでも挙げた様に、正直最初は楽しみな反面、不安なことが多かったです。語弊を恐れずに言うならば、鶴見の遠さや毎週土曜の夜を費やすということも負担に感じてしまっていたことも否定できません。ただ、一度関わり始めるとよる教室に行かない土曜日はどこかソワソワしていた様な気もします。

初めは「ボランティアをしてあげる」立場で通っていたのも、次第に彼らと仲良くなり、慕われる様になるにつれて兄貴分の気持ちで面倒を見ていました。行っているプロジェクトの性質上、「教える・教わる」立場はあるものの、いつからか僕らの関係は非常にフラットなものになっていました。良い意味で、彼らのルーツや家庭事情は全く気にならないようになって「一人のヒト」として接していくことを通して、ゼミで学んでいる多文化共生のあるべき姿は、きっとよる教室で僕らが築いた自然な形なのかもしれない、とも思う様になりました。

如何にも月並みですが、案外実際に体験しないと得られない気付きです。



「マラソン」

7期 飯塚崇矩





夜教室のイメージ:和気藹々。真面目。勉強。鶴見。帰りはみんな早め。

今年のFWで嬉しかったこと:久しぶりに行った時、何人かが名前を憶えてくれたこと。

自分は、思ったよりも固定観念とか先入観とか、そういうものにまみれた人間だなと、気づきました。

高校生の時に、どこかで聞いた多文化共生という言葉がずっと忘れられずに興味を抱き続けて早3年。火曜日の4・5・6限でたくさんの時間をかけてたくさんのことを考えました。そして、よる教室ではきっと座学だけでは得られなかった学びを実感することができたと思います。

“外国につながる子どもたち”に勉強を教えるなんて、はたしてできるのか、日本語はどこまで通じるのか、受験はできるのか……。はじまる前は様々なことに気を揉んでいましたが、いざ始まってみると、そんな心配はむしろお節介だったのではないかというくらい、彼らは「中学3年生」でした。夢があって、ポジティブで、趣味があって、一生懸命に勉強する。楽しいことが大好きだけど、人見知りだったり、進路で悩んだり、勉強がうまくいかずにイライラしたりもする。そんな彼らの姿になぜか驚きを覚える自分がいて、それと同時に、驚く自分にがっかりしました。

確かに、先入観やステレオタイプは、誰しもがもってしまいがちなものです。しかし、よりによって多文化共生を勉強する身で、差別や偏見を見過ごしたくないと思う自分が、こんな形で自分自身の中にある先入観と向き合うことになるとは、思ってみもしませんでした。

多文化共生について、多くの知識を得て、その価値が鮮明に見えていくにつれて、自分の中の嫌な部分が見えなくなっていったのだと思います。思い返せば、電車に乗っている時、テレビを見ている時、散歩をしている時、“〇〇だからこうなんだ”と判断する自分はたくさんいました。「学んだから、固定観念や先入観、差別、偏見などというやましい観念からは解放されている」無意識のうちにこんな理想の自分が出来上がっていたことに気づかされたからこそ、私はよる教室でがっかりしたのだと思います。理想の自分になりきって、いい気になっている私を、“地に足付けて考えろ!”と現実まで引きずりおろしてくれたのが、私にとってのよる教室です。



きっかけ

7期 平野玲奈



### お気に入りの写真

これは担当した生徒に平日に呼ばれ勉強が終わった帰りに撮った写真。彼より自分の方が楽しそう(笑)



### 今だから言える〇〇、今年のFWで嬉しかった事

今だから言えるけど、よる教室行きたての頃は、めちゃくちゃ緊張してました(笑)。でも、毎週行けるようになって生徒との距離も縮まり、今度は楽しくてたまらなくなりました！

よる教室で担当していた生徒が帰り際にいつも「よーすけ、今日はありがとうね」って言ってくれたことです。教えている時は全然勉強にも集中せず、ふらふらしているばかりで大変だったので、その分彼からのその言葉は普通よりも何倍にも嬉しかったです。

### FriendProjectを通して感じたこと

キャッチコピーとして付けさせて頂いた通り、この一年間の FriendProject の活動を通して、私たちが彼らに与えられたことよりも彼らから与えられたものの方が多かったような気がする。「外国につながる子供たち」である彼等と出会って初めは色眼鏡で見えてしまったり、彼らの言動に驚いたり、難しさを感じていた。だけど、土曜の夕方鶴見に行き、彼等と過ごし回を重ねるごとに楽になっていった。どうすれば上手くコミュニケーションを取れるか、どうしたら勉強を頑張ってくれるか、初めはそんなことを考え悩んでいた。しかし、行けば行くほど考えれば考えるほど、どうやったら理解してもらえるのか、どうすればもっと生徒たちにとってこの時間がいいものになるのか、そう考えることがいつの間にか「悩ましいこと」から「楽しいこと」に変わっていった。

FriendProject をやっていく中で初めて自分とは境遇や環境が多く異なる生徒に接してきて、少なからず自分との違いを感じる事があった。だけど、同時に感じたのは、違いを無理に感じるのではなく「共通する部分」、僕達と「変わらないところ」があるということを知ること、感じる事が大事なんだということだった。

これから支援する子たちが中学生から高校生へと変わること、また違った問題や悩みが出てくると思う。でも、その中でもやはり、違いに目を向けすぎず、共感できる事や共通する事を探していくことが彼らにとっても僕らにとっても意味のあることだと思う。

次はどんな子が来るのかな、どんな学びがあるのかな、次の活動が今から楽しみだ。



「学ばせてくれた中学生、学ばせられた大学生」

7期 岩田 陽介

## 夜教室のイメージ



みんな違うバックグラウンドをもっているから、おもしろい

今年のフィールドワークで嬉しかったこと

初めて会ったうちゃんと盛り上がる共通の経験や関心があったこと。

私の今までの経験、中華圏に住んでいたことや、中国本土にも旅行に何度か行ったことがあること等、うちゃんとの共通点も探りながら話した。とても興味をもってくれて、中華料理は何がすき？中国語は話せる？香港はどうだった？将来は何をしたいの？将来はまた海外に戻りたい？と、たくさん質問してくれた。

私も、うちゃんは？日本以外の場所に行きたい？どこに行きたい？将来は何がしたい？と聞いていくうちに、彼女がどのような目標をもち、そのために今何をするのがベストか、ということをしっかり自分の中で強くもっていることを感じた。

自分のやりたいことを力強く言える子って本当に素敵だな！とすごく思った。

みんな色々なバックグラウンドをもっていて、色々な経験をしていて、若い頃から人一倍考えることはあったかもしれないけど、とてもいきいきしていて、私も限界をつくってはいけないな、と思った。そして、明確な目標をもつことが、自分の原動力になることを教えてもらったような気がする。



言葉に出すことって大事

7期 板橋瑛美



### 今年のフィールドワークで嬉しかったこと

特に一緒に勉強することの多い L ちゃんは、教室で「勉強したくない」等ネガティブな発言をすることが多い。しかし必ずその日の夜に「今日のごめんね。来週からちゃんと勉強する！来週絶対来週ね！いつもきてくれてありがとね。」と連絡をくれる。

私は毎週土曜日、鶴見に行って中学生たちと会うことをとても楽しみにしている。春学期は、まずは中学生と大学生仲良くなることを試み、レクリエーションをたくさん行った。しかし夏休みが明け、秋学期になると生徒たちの表情は変わった。高校受験というものが近づいたからだろうか。秋学期の目標は、全員が自分にあった高校に合格することということだった。よる教室をより受験を意識した、勉強を中心とした雰囲気にするため、私たちは一人の生徒に大学生を数人つける担当制を取り入れた。数人の大学生がひとりの生徒を担当することで、大学生たちの責任感も増したように見える。志望校がもうすでに決まっている生徒もいれば、ぎりぎりまで悩んで決まらない生徒もいた。私は生徒たちと一緒に志望校を考え、一人一人の将来を聞いてとてもわくわくした。

受験当日まであとわずかではあるが、私は中学生たちが今まで頑張ってきたのを見てきたので、生徒たちに悔いなく受験に臨んでほしいと思う。一生懸命に勉強に励む姿は、初めて出会った時と全く異なる。生徒たちと出会い、自分自身、また他の大学生も変わったように感じる。何がどう変わったと考えてみても、とても複雑で言葉で簡単に表すことができない。しかし、両者が一年間を通じて変化したことは確かだと思う。それはとても居心地の良い変化だ。中学生たちと出会えて本当に良かった。生徒たちと出会う機会を与えてくれた塩原先生とこのゼミに感謝したい。

「居心地の良い変化」

7期 永田さくや





私は「ボランティア」や「支援」などの言葉が嫌いだった。するのも、されるのも、嫌いだった。何の見返りを求めずに、見ず知らずの他人に何かを与える、という純粋に自他的な行為が成立するとは到底思えず、自己満足な言葉だと思っていた。それは単に私が面倒くさかったのか、自己効力感が低かったのか、そう思っていた理由は分からない。だからはじめて「よる教室」という空間に足を踏み入れる時は、何か重い荷物を背負う気がして、勇気が必要だった。

そんな気持ちではじまった私の「よる教室」であったが、結局、私が嫌いな「ボランティア」をすることはなかった。自分の考えを伝えたことはあっても、彼らの「支援」をした覚えがない。だから結局、その言葉に対する抵抗感は完全には消えていないと思う。ただ私は、自分の母国について楽しそうに話す人と初めて出会い、言葉を使わずに私を爆笑させてくれる人にも初めて出会った。2ヶ月前とは全然違う顔をして勉強に向かう人とも出会った。毎回違う出会いを繰り返し、互いの時間を共有した。ただそれだけのことをしていた気がしている。私は殆どの時間をオーケストラの活動に捧げ、息が詰まりそうになる時が沢山ある。そんな時に、「よる教室」のみんなと共有する時間はとても貴重で、ふとした時にみんなと会いたくなる。参加出来る頻度は高くないが、あの場所には、思いの外中毒性の強い時間が流れているようだ。私にとって、あ～よる教室行きたいな～と思える場所、時間をかけたい場所になっているらしい。

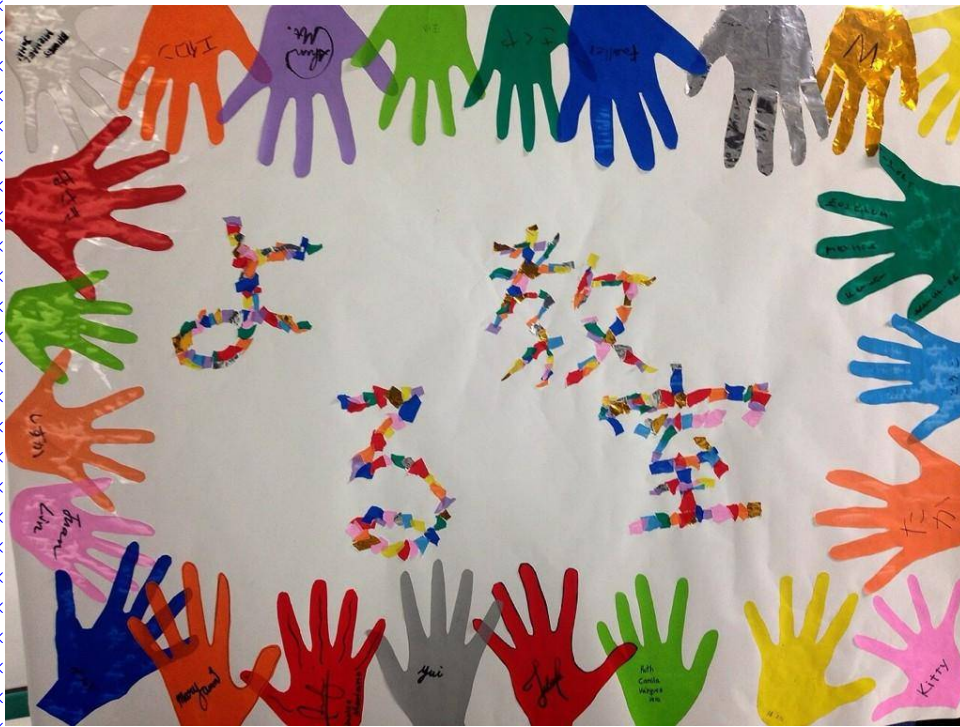


「時間をかけたい場所」

7期 田代 静



## お気に入りの写真



今だから言える〇〇、今年のフィールドワークで嬉しかったこと

・今だから言える「最初は怖かった」

子どもとふれあうような機会を持ったことがなく、また中学生の時に自分自身はかなりスレていて生意気だったということもあり最初はかなり警戒心を持って参加していたが、次第に子どもたちの純粹さ、無邪気さが見えてきて、ある種の先入観が取り払われて楽しくふれあえるようになった。

・嬉しかったこと…「子どもたちが毎回元気な顔を見せて来てくれたこと」

活動をはじめる前に、去年のよる教室はうまくいかない部分も多く、子どもがひとりも来てくれない日もあったなど聞き、不安もあったのだが、実際に自分たちで活動をはじめてみると、子どもたち自身が楽しんで来てくれていたようで、ほぼすべての子どもたちが毎回何も言わずとも通ってきてくれるようになった。

中学生は、受験を見据えて勉強面をメインに目標、計画をたてて活動をしてきたが、受験のための勉強の場というだけでなく、気軽に来られる居場所のようにも少しはなれていたかなと思う。今年1年の活動を通して生まれた子どもたちとの「つながり」を来年以降にも活かしていきたい。

[つながる]

7期 鈴木脩大



## お気に入りの写真



今だから言える〇〇、今年のFWで嬉しかったこと

今だから言える〇〇…ゼミにはよく遅刻したが、FWは一番乗りのことも多かった♪

嬉しかったこと…子どもたちが一年通してほぼ休まずに来てくれたこと

一年を振り返ると色々あったなと思います。春学期は居場所づくりをメインでやっていたので子どもたちも楽しそうにやっていた。ですが、秋になると受験も近くなり、私は子どもを奮い立たせようと叱ることが増えました。もちろん、子どもを思いやっていたこと。しかし、Cちゃん(私が担当している子)は反発してよりやる気をなくしたようで、「最近のナオは怖いよ」とまで言われてしまいました。11月あたりはもう私自身が行く気をなくしてしまい、12月は少し休んでリセットしようと思いました。再びFWに戻ってからは、私は彼女と空いてしまった距離を埋めるために春学期の頃を思い出し、彼女の何気ない話をすべて聞くよう心掛けました。次第に、彼女は家族や将来の夢等、多くのことを話してくれるようになりました。そして、私も対等に自分自身のことを話すようになりました。少しずつ私に対する信頼が戻り、勉強に対する姿勢も変わってきました。これまで口に出すことのなかった彼女自身の夢や受験までの道筋も明確になったのだと思います。以前は自分でも気づかず彼女に対し上から目線の態度だったのに対し、相手と“同じ場所”、“同じスピード”でい続けられるかがいかに大切か学んだ経験でした。

濃

7期 大西菜穂





(第1回の写真です。色々自分の中で発見があった時に第一回のころと比べて今でも時々振り返る写真です)

今だから言える〇〇、今年のフィールドワークで嬉しかったこと

❖今だから言える〇〇

ゼミ生と情報共有を常にしているので、「今だから」というものはあまりないですね・・・強いて言うならいつも自分品川経由で帰っていたのですが、1月になって実は川崎経由の方が断然運賃が安かったということに気付いたことくらいでしょうか笑。本当に私事です

❖今年のフィールドワークで嬉しかったこと

今年のフィールドワークで嬉しかったことはたくさんありますが、一番は担当の生徒の自分に対する態度の変化だと思います。みんなの前ではそうでもないのですが、実は担当の子非常に疑い深い子なんです。表にはあまり出さないのですが、最初のうちは自分に対しても節々でそういったことが感じられました。今では(テスト期間中にも)自分に電話をかけ「明日会おうぜ！」と向こうから声をかけてくれるほどです。お互いの文化的差異やこれまでの人生の歩み方の違いなどから、中々コミュニケーションがうまく取れなかった時期もあり苦労しましたが、その分今こうやって接することができることに嬉しさを感じています。

自分の中で非常に重要なフィールドワークだったと、今本当に思います。フィールドワークの形式的に、最初は「教えてあげる」という意識が強かったのですが、どちらかというとも教えてもらうことの方が多かったように思います。最初は自分の価値観(しっかり勉強して受験していい学校出て社会人になる=幸せ)と異なる生き方や考え方はかなり戸惑ったというのが本音で、生徒と接するときにも苦労していました。しかし、一年フィールドワークを続けた今、人が当たり前には有している権利、いわゆる人権についてその大切さを深い次元で理解したように思います。まだ模索中で漠然としていてしっかりと文面に表すことができませんが、何かしら自分が将来どうしたいのかが見てきたような気がします。

「学び合い」

7期 田上直弥





### 今年のフィールドワークを表すキャッチコピー

「いろいろあるけど、誰かが居た。」: 中学生側にもゼミ生にも、それぞれ一人一人に日常で色々なことがあって、それでもあの場でたった数時間でも一緒に時を過ごせたのは、お互いの誰かのことを思い浮かべていたから、だったのかなと思ったため。



▷クリスマス会(12/20)の集合写真。  
学年を越えて一堂に会した雰囲気  
写真から伝わってくる上、流行の  
セルフリースティックが本領を發揮し  
この人数が一枚におさまったところ

### 今年のフィールドワークで嬉しかったこと、今だから言える〇〇

年間を通して参加できた回数は少なかったが、久しぶりに顔を出しても中学生が名前を覚えてくれ、あたたかく受け入れてくれたことは非常に嬉しかった。また、FWが終わったあと、7期生で駅隣接のCIAL6階にてご飯を食べる際、私が参加した時は、自然な流れで「おぼん de ごはん」率が高かったが、一回「とんかつ和幸」に行ってみたかったことは結局言い出せなかった。

私は正直なところ、あまり教えることが得意ではないため、自信のない状態で受験を控えた中学生に接していいのかと、始めこそ躊躇いはあった。しかし年間を通して、参加回数が少ないにも関わらず、私の説明をわかりやすいといってくれ、勉強以外の話もたくさん聞かせてくれる中学生が本当にかわいらしく、学習支援などという言葉には収まらない、“人”との出会いの場であったと実感した。真摯に向き合う同期の姿をかつこよく感じる瞬間ばかりで様々な発見があった。

「いろいろあるけど、誰かが居た。」

7期 杉本菜々子



## FPを表すキャッチコピー

今年のFPのキャッチコピーは、「関わる責任」でした。参加できた回数は少なく、僕がいた時はほとんどマンツーマンで勉強を教えていました。Lちゃん担当として彼女の苦手な国語を中心に教えるとともに、彼女の志望校を一緒に考えるなど、大きな責任を任せていただきました。短い期間でも彼女の人生の選択肢を一緒に考える機会を設けていただけたことが僕にとって最も印象的な出来事です。



## お気に入りの写真とその理由

僕のお気に入りの写真は右の前期よる教室の最後の写真です。

参加できた回数は非常に少なかったですが、子どもたちと仲良くなることができ、一緒に作品を創ることができたことが一番思い出に残っています。

## 今だから言える嬉しかったこと

前期よる教室最後の日に、ほぼ初めて会う子どもたちが自分を快く受け入れてくれたことは非常に嬉しかったです。特にFくんとはよく打ち解けることができ、帰り際に「次回はいつくるの?」と聞いてきてくれたことがとても印象に残っています。

個人的な都合によって毎週土曜日になかなか参加することができなかったことは非常に残念でした。できれば受験を控える子どもたちにもっとコミットしたいと考えていましたし、ゼミ生との交流の機会としてもよる教室にあまり参加できなかったことは心残りです。

ただ、少ない回数の中でも、言葉の壁や家庭の悩みなど、外国にルーツを持つ子ども特有の悩みを知ることができたことは大きな学びであると考えています。実際にそういった場面に直面した時に抱いた葛藤や、なんとも言えない感情からは多くのことを考えさせられました。

ここで学んだことを経験学習で終わらせず、ゼミで学んだ理論などと結びつけながら、今後の勉強に生かしていきたいと思います。

「関わる責任」

7期 根本昌輝



お茶目な A 君となおキティのツーショットかと思いきや背後に…



今だから言える〇〇、今年のフィールドワークで嬉しかったこと

次週が OB 会で夜教室がないことを伝えたときに、A 君が「どうして？」と聞いてきてくれたこと。「夜教室が楽しい」とか「夜教室が好き」と直接に感情表現してくることはなかったけれど、“ないと気になる”存在ではあるのだなあ、と感じ少し嬉しく思いました。

「毎週土曜日はゼミのフィールドワークがあって…」そういうと決まって「大変だねえ」と言われ続けた1年でした。でも私は、先生とも友だちとも少し違うポジションに立ち、なんだか私自身も少し素直な気持ちになれる気がする、そんな夜教室が大好きでたまりません。



“当たり前、が壊される場所”

7期 田中瞳子

お誕生日ケーキをもらって嬉しそうなF君



「ゆるやかな連帯感」

7期 松坂 くるみ

初めは、夜教室がどんなものなのかあまり分かっておらず、そこまで積極的に参加するつもりではなかったけれど、何回か顔を出しているうちに私自身が行きたいと思える場になっていった。

嬉しかったことは数えきれないくらいあるが、子供達との距離が縮まったと感じた時が一番やりがいを感じた。学校の書類で読めない文章があった時にLINEをくれたり、学校説明会に行きたいからついてきてほしいと頼まれたりしたことで、頼られることの喜びを感じた。

この一年間、私にとって夜教室の存在はかなり大きなものでした。FWが始まった5月の時点では、まさかここまで自分が夜教室に参加するようになると思っていなかったのが正直なところ。良くも悪くもあまり深く考えないままによる教室に参加し始めたので、子供たちと過ごしていく中で予想外に悩むこともありましたが、そのおかげで自然に人対人のコミュニケーションがとれたかなと思っています。このような機会を与えてくださった先生、富本さん、コーディネータに心から感謝しております。



## フィールドワークのキャッチコピー

変え合い、変えられ合い

共に過ごしていく中で生徒と学生の関係性が変わっていきました。生徒が変わったことに応じて学生が変わり、学生が変わったことに応じて生徒が変わる。その繰り返しの1年間だったと思います。

お気に入りの写真、または、フィールドワークのイメージ

普段の談笑しながらの勉強風景の写真です。毎回この時間を積み重ねて来たのが7期のよる教室だったのかなと思います。

今年一番嬉しかったこと、今だから言える〇〇

個人的に嬉しかったことはたくさんありますが、フィールドワークコーディネーターとしてよる教室が毎回ほとんどの生徒が参加してくれる環境になったことは非常に嬉しかったですし、ほっとしている部分でもあります。また、当初想像していた以上に生徒たちにとっても、ゼミ生にとっても生活の中で存在感のある空間になった気がしています。今年のよる教室は活動に参加して生徒たちと向き合ってくれたゼミ生とラウンジに来てくれる子ども達あってのもの。みんなに感謝の気持ちでいっぱいです。



正直、半年間の留学から帰って最も感じたことは、私が居ぬ間により強まったゼミ生と生徒達のつながりです。それは時には苦しみを打ち明けられる相手として、また時には気心の知れた仲間のように感じられ、お互いにとって相手がかかけがえのない存在となっているようでした。信頼関係は一日にしてならず。

変え合い、変えられ合い

7期 秦 理江



# 指導教員より

今年も Friends Project 報告書をまとめる時期になりました。この報告書のために 6・7 期のゼミ生が寄稿してくれた文章を読ませていただき、みなさんがゼミの活動に真摯に参加してくださる様子が伝わってきました。本当に、ありがとうございました。

ところで最近の塩原ゼミの活動では、この“Friends Project”という名称はめっきり使われなくなりました。2008 年度後半、ゼミ 1 期生たちといっしょに川崎市ふれあい館での活動の準備をしていたとき、ある学生がこの名称を提案してくれました。その後、学外での実践は横浜市鶴見区での「鶴見よる教室」「外国につながる高校生の居場所づくり」へと発展していき、また 2010 年度からは「三田の家」で過ごすことも塩原ゼミのもうひとつの柱になりました。こうして“Friends Project”という名前は、正課の授業を含む塩原ゼミの活動全体を表す言葉となりました。

やがて 2013 年度の春学期をもって「三田の家」は終了し、三田キャンパスの教室を拠点としたサブゼミ活動が始まりました。ほぼ毎回みんなで夕飯をつくって食べながら語りあい、かなりの確率でお酒も入っていた「三田の家」とは異なり、三田キャンパスでのサブゼミは正課の授業に近い内容になりました。こうしていまでは、鶴見や川崎での校外活動を「フィールドワーク」と呼び、大学内での活動を「本ゼミ・サブゼミ」と呼ぶ、ある意味「ふつうな」呼称が定着したようです。

今年度のゼミは、例年よりもハードだったかもしれません。いっぽうで 6 期・7 期のゼミ生のみなさんはこれまでの先輩たちよりも本ゼミ、サブゼミでたくさん文献を読み、まじめに卒論報告をし、卒論を書きました。フィールドワークにあまり参加しなかった人にとっては、塩原ゼミは政治学科の他のゼミとそう変わらないと感じたかもしれません。僕自身、以前に比べるとみなさんに学問的な知識や視点を学んでもらうことを意識するようになったのは確かで、それはそれで正しい変化の方向だと思います。

他方で、とくに鶴見でのフィールドワークに深く関わってくれた学生にとっては、このゼミは他ではなかなか得られない経験と学びの場になっていると思います。もちろん、その分だけしんどいことも多いと思いますが、時が経つにつれてそれがみなさん自身の思考力や感受性の深まりにつながっていることが、この報告書に寄せられた文章を読めば伝わってきます。

今年度、ひとつ悔いが残るのは、僕自身が家庭の事情で鶴見や川崎でのフィールドワークになかなか参加できなかったことです。そのことかえって、みなさんといっしょに現場（フィールド）でさまざまな活動（ワーク）をすることが、僕自身の社会学者としての、教師としての、そして人間としての成長の機会でもあることを痛感しています。

慶應義塾大学法学部教授

塩原良和

# 編集後記

今年度の Friends Project 報告書は、主に鶴見でのフィールドワーク（よる教室と居場所づくり）についてまとめました。ゼミ生一人一人に、

1. フィールドワークのキャッチコピー
2. お気に入りの写真、または、フィールドワークのイメージ
3. 今年一番嬉しかったこと、今だから言える○○
4. 自由記述

というテーマで原稿を書いてもらいました。同じテーマで同じフィールドワークについて書いてもらいましたが、共通する思いもあれば、個性豊かな塩原ゼミらしく、それぞれの視点のそれぞれの思いが詰まった原稿が集まっています。

共通する点の一つとしては、「フィールドワークって何してるの?」と聞かれたときに、どう答えてよいかわからないという点があるかと思います。決して一言では表せない、中高生と大学生で作る不思議な空間。そこで私たちが感じた、様々な苦悩、葛藤、喜び、嬉しさ。そして、私たちが与えられたもの。そういったものを、この報告書を通して読者の皆様感じていただけたら嬉しく思います。

最後になりましたが、鶴見でのフィールドワークでいつもお世話になっている富本潤子さんやラウンジのスタッフの方々、ラウンジに来てくれる中高生、そして、このような機会をゼミを通して私たちに与えてくださる塩原先生に感謝を申し上げます。

2015年3月  
編者一同